

保育士養成課程における実習施設の評価と学生の自己評価の比較

長谷川美香 坂本 真一 齋藤美智子 堺 秋彦

A Comparison of Evaluating Practical Training Facilities and Self-Evaluation of Students in a Nursery Teacher Training Course

Mika Hasegawa Shinichi Sakamoto Michiko Saito Akihiko Sakai

Abstract

In this paper, in order to provide effective training guidance in a nursery teacher training course, the researchers conducted a self-evaluation after the end of the “Nursery Practice I” course for students and a comparative evaluation of practical training facilities. The results indicate that, although there were differences in the number of respondents due to the content of the evaluation, there is a clear difference in understanding between the faculty and student sides. In addition, there were cases where the evaluation was low or high.

In order to facilitate effective practical instruction guidance, it was discovered that after-school instruction and prior guidance on the next training was needed, based on the evaluation of the training facility and the results of the student self-evaluations.

Furthermore, it is necessary to clarify why the differences in understanding occurred, and why the evaluation may be high or low. The similarities or differences in the viewpoints of the respondents and the criteria of mutual evaluation should be made clear. In order to set up a successful system, the issues of disclosing the results of practical assessments, sharing these results with the faculty in charge, and utilizing them in the guidance of students need to be addressed.

Key words : Early childhood training, practical guidance, evaluation of practice facilities, self-evaluation

I はじめに

本学生活科学科福祉こども専攻こども保育コース（以下、こども保育コースと記す）では、幼稚園教諭二種免許、保育士資格を取得することが出来る。学生は2年間の中で、幼稚園教諭二種免許を取得するための実習を2回（「幼稚園教育実習Ⅰ」、「幼稚園教育実習Ⅱ」）、保育士資格を取得するための実習を3回（「保育実習Ⅰ（保育所）」、「保育実習Ⅰ（施設）」、「保育実習Ⅱ」または「保育実習Ⅲ」を選択）行う。¹

それぞれの実習の前後には、学内で事前指導や事後指導を実施している。²その内容は実習段階により違いはあるが、実習前の指導は、実習の意義・目的、実習内容の理解、実習の留意事項、実習の計画と記録、幼稚園や保育所、施設の役割や機能の具体的展開、子どもの保育及び保護者・家庭への支援と地域社会との連携、保育者の業務や職業倫理についてなど多岐に渡る。実習後は、実習の統括と自己評価、課題の明確化などを指導している。

こども保育コースでは、事後指導の中で行われる学生と教員との個別面談は、実習先からの実習評価票を基に行っ

てきた。実習評価票を開示することはしないが、必要に応じて口頭で評価内容を伝え、課題の明確化などその他の事後指導や、次の実習の事前指導にも活かしている。2018年度から、学生自身が実習を客観的に振り返り今後の課題を見出せる様に、また事後指導や次の実習の事前指導に活かせる様にと、事後指導において学生による自己評価票の記入を行うようにした。実習評価票と自己評価票は別物として扱い、結び付けて活用することはしなかった。

本稿では、実習評価票と自己評価票を結び付けて活用することで、今後、学生の現状に合わせた効果的な実習事前指導、事後指導を行うための方向性や課題を整理することが出来るのではないかと考え、実習先からの実習評価票、学生の自己評価票の比較を行った。

Ⅱ 方 法

こども保育コースの2年生を対象に、2年次6月(2018年度)の「保育実習Ⅰ(施設)」を終えた後、事後指導の中で、自己評価票の記入を行った。「保育実習Ⅰ(施設)」を行った学生は48名、実習施設は福島県内28施設、福島県外1施設の29施設である。

自己評価票は、実習終了後に実習施設が学生について評価する実習評価票に基づき、同じ12の評価内容(2つの大きな項目があり、項目「態度」に含まれる評価内容は、「意欲・積極性」・「責任感」・「探求心」・「協調性」の4つ、項目「知識・技能」に含まれる評価内容は、「施設の生活と一日の流れの理解」・「施設の役割と機能の理解」・「子ども(利用者)の観察とその記録」・「個々の状態に応じた援助やかかわり」・「養護内容の理解」・「記録に基づく省察・自己評価」・「子ども(利用者)の活動と生活の環境の理解」・「保育士の役割と倫理の理解」の8つ)で作成した。その他に、実習を振り返って自由に記述する欄、今後の課題について書く欄も設けた。なお、実習評価票ではそれぞれの評価内容の評価は、実習生として、4が「優れている」、3が「適切である」、2が「努力を要する」、1が「多くの努力を要する」であるが、自己評価票は学生自身が記入することから表現を変え、4が「とても良く出来た」、3が「良く出来た」、2が「あまり良く出来なかった」、1が「出来なかった」とした。

実習施設の評価と学生の自己評価の集計は、12の評価内容ごと、さらに実習施設種別ごとに分け、実習先の評価と学生の自己評価を比較するためにクロス集計を行った。

実習施設種別は、児童養護施設7施設、福祉型障害児入所施設4施設、医療型障害児入所施設1施設、障害者支援施設14施設、乳児院1施設、児童相談所一時保護施設2施設となっている。医療型障害児入所施設、乳児院、児童相談所一時保護施設については、数が少ないため施設、学生が特定されない様、医療型障害児入所施設分は福祉型障害児入所施設分と合わせて集計し、乳児院分、児童相談所一時保護施設分は合わせて集計した。

前述した様に、自己評価票は2018年度から実施しているが、本稿ではまず、一つの試みとして、「保育実習Ⅰ(施設)」の実習評価票と自己評価票を比較することとした。

Ⅲ 結果および考察

調査の結果は、以下、表の通りである。評価内容ごとにまとめた。なお、表中では、「児童」…児童養護施設、「障児」…福祉型障害児入所施設・医療型障害児入所施設、「障者」…障害者支援施設、「その他」…乳児院・児童相談所一時保護施設をそれぞれ指す。

1. 結 果

(1) 意欲・積極性

施設の評価について見ると、「優れている」12名、「適切である」が30名、「努力を要する」が5名、「多くの努力を要する」が1名であった。

表 1

意欲・積極性		学 生 の 自 己 評 価						
		とても良く出来た	良く出来た	あまり良く出来なかった	出来なかった			
施設 の 評 価	優れている	児童 1	8	児童 4	5	児童	児童	
		障児 1		障児		障児		
		障者 2		障者 4		障者		障者
		その他		その他		その他		その他
	適切である	児童 1	17	児童 7	5	児童 2	児童	
		障児		障児 4		障児 1		障児
		障者 6		障者 6		障者		障者
		その他 1		その他		その他 2		その他
	努力を要する	児童	4	児童	1	児童	児童	
		障児		障児 1		障児 1		障児
		障者		障者 3		障者		障者
		その他		その他		その他		その他
	多くの努力を要する	児童	1	児童	1	児童	児童	
		障児		障児		障児		障児
		障者		障者 1		障者		障者
		その他		その他		その他		その他

学生の自己評価を見ると、「とても良く出来た」が12名、「良く出来た」が30名、「あまり良く出来なかった」が6名、「出来なかった」はいなかった。

施設側の評価、学生の自己評価、いずれも「適切である」、「良く出来た」が最も多くなっている。

評価をクロスした時に一番多いのが、施設の評価「適切である」・学生の自己評価は「良く出来た」(17名)で、二番目に、施設の評価は「優れている」・学生の自己評価は「良く出来た」(8名)、施設の評価は「適切である」・学生の自己評価は「とても良く出来た」(8名)が多い。

顕著な相違点として、施設側が「適切である」と評価したのに対し、「あまり良く出来なかった」と自己評価した学生が5名いる。また、施設側が「努力を要する」と評価したのに対し、「良く出来た」と自己評価した学生が4名、施設側が「多くの努力を要する」と評価したが、「良く出来た」と自己評価した学生が1名いる。

(2) 責 任 感

表 2

責 任 感		学 生 の 自 己 評 価						
		とても良く出来た	良く出来た	あまり良く出来なかった	出来なかった			
施設 の 評 価	優れている	児童 4	2	児童 1	1	児童	児童	
		障児 1		障児		障児		
		障者 7		障者 1		障者		障者
		その他 1		その他		その他		その他
	適切である	児童 7	8	児童 2	1	児童 1	児童	
		障児 3		障児 2		障児		障児
		障者 9		障者 3		障者		障者
		その他 1		その他 1		その他		その他
	努力を要する	児童	1	児童	1	児童	児童	
		障児 1		障児 1		障児		障児
		障者		障者		障者 1		障者
		その他		その他		その他		その他
	多くの努力を要する	児童	1	児童	1	児童	児童	
		障児		障児		障児		障児
		障者		障者 1		障者		障者
		その他		その他		その他		その他

施設の評価について見ると、「優れている」15名、「適切である」が29名、「努力を要する」が3名、「多くの努力を要する」が1名であった。

学生の自己評価を見ると、「とても良く出来た」が34名、「良く出来た」が12名、「あまり良く出来なかった」が2名、「出来なかった」はいなかった。

施設側の評価は「適切である」、学生の自己評価は「とても良く出来た」が最も多い。

評価をクロスした時に一番多いのが、施設の評価「適切である」・学生の自己評価は「とても良く出来た」(20名)である。二番目に、施設の評価は「優れている」・学生の自己評価は「とても良く出来た」(13名)が多い。

顕著な相違点として、施設側が「適切である」と評価したのに対し、「あまり良く出来なかった」と自己評価した学生が1名いる。また、施設側が「努力を要する」と評価したのに対し、「とても良く出来た」、「良く出来た」と自己評価した学生がそれぞれ1名、施設側が「多くの努力を要する」と評価したが、「良く出来た」と自己評価した学生が1名いる。

(3) 探 求 心

表 3

探 求 心		学 生 の 自 己 評 価			
		とても良く出来た	良く出来た	あまり良く出来なかった	出来なかった
施 設 の 評 価	優れている	児童 2	児童 2	児童	児童
		障児 1	障児	障児	障児
		障者 1	障者 3	障者	障者
		その他	その他	その他	その他
	適切である	児童 1	児童 9	児童	児童
		障児	障児 2	障児 2	障児
		障者 2	障者 9	障者	障者
		その他 1	その他 1	その他	その他
	努力を要する	児童	児童 1	児童	児童
		障児	障児 1	障児 1	障児
		障者 1	障者 4	障者 2	障者
		その他 1	その他	その他	その他
	多くの努力を要する	児童	児童	児童	児童
		障児	障児	障児 1	障児
		障者	障者	障者	障者
		その他	その他	その他	その他

施設の評価について見ると、「優れている」9名、「適切である」が27名、「努力を要する」が11名、「多くの努力を要する」が1名であった。

学生の自己評価を見ると、「とても良く出来た」が10名、「良く出来た」が32名、「あまり良く出来なかった」が6名、「出来なかった」はいなかった。

施設側の評価、学生の自己評価、いずれも「適切である」、「良く出来た」が最も多くなっている。

評価をクロスした時に一番多いのが、施設の評価「適切である」・学生の自己評価は「良く出来た」(21名)で、二番目に、施設の評価は「努力を要する」・学生の自己評価は「良く出来た」(6名)が多い。

顕著な相違点として、施設側が「適切である」と評価したのに対し、「あまり良く出来なかった」と自己評価した学生が2名いる。また、施設側が「努力を要する」と評価したのに対し、「とても良く出来た」と自己評価した学生が2名、「良く出来た」と自己評価した学生が6名いる。施設側が「多くの努力を要する」と評価したが、「あまり良く出来なかった」と自己評価した学生が1名いる。

(4) 協調性

表 4

協調性		学生の自己評価				
		とても良く出来た	良く出来た	あまり良く出来なかった	出来なかった	
施設の 評価	優れている	児童 1	4	児童 2	児童	児童
		障児		障児		障児
		障者 5		障者 2		障者
		その他 1		その他		その他
	適切である	児童 9	14	児童 3	児童	児童
		障児 1		障児 5		障児
		障者 6		障者 6		障者
		その他 2		その他		その他
	努力を要する	児童	3	児童	児童	児童
		障児 1		障児 1		障児
		障者 1		障者 2		障者
		その他		その他		その他
	多くの努力を要する	児童		児童	児童	児童
		障児		障児		障児
		障者		障者		障者
		その他		その他		その他

施設の評価について見ると、「優れている」11名、「適切である」が32名、「努力を要する」が5名、「多くの努力を要する」はいなかった。

学生の自己評価を見ると、「とても良く出来た」が27名、「良く出来た」が21名、「あまり良く出来なかった」と「出来なかった」はいなかった。

施設側の評価は「適切である」、学生の自己評価は「とても良く出来た」が最も多くなっている。

評価をクロスした時に一番多いのが、施設の評価「適切である」・学生の自己評価は「とても良く出来た」(18名)で、二番目に、施設の評価は「適切である」・学生の自己評価は「良く出来た」(14名)が多い。

顕著な相違点として、施設側が「努力を要する」と評価したのに対し、「とても良く出来た」と自己評価した学生が2名、「良く出来た」と自己評価した学生が3名いる。

(5) 施設の生活と一日の流れの理解

施設の評価について見ると、「優れている」11名、「適切である」が31名、「努力を要する」が6名、「多くの努力を要する」はいなかった。

学生の自己評価を見ると、「とても良く出来た」が23名、「良く出来た」が24名、「あまり良く出来なかった」が1名、「出来なかった」はいなかった。

施設側の評価、学生の自己評価、いずれも「適切である」、「良く出来た」が最も多くなっている。

評価をクロスした時に一番多いのが、施設の評価「適切である」・学生の自己評価は「良く出来た」(17名)で、二番目に、施設の評価は「適切である」・学生の自己評価は「とても良く出来た」(14名)が多い。

顕著な相違点として、施設側が「優れている」と評価したのに対し、「あまり良く出来なかった」と自己評価した学生が1名いる。また、施設側が「努力を要する」と評価したのに対し、「とても良く出来た」と自己評価した学生が2名、「良く出来た」と自己評価した学生が4名いる。

表 5

施設の生活と 一日の流れの理解		学 生 の 自 己 評 価			
		とても良く出来た	良く出来た	あまり良く 出来なかった	出来なかった
施設 の 評 価	優れている	児童 4	3 児童 3 障児 障者 その他	1 児童 障児 障者 1 その他	児童 障児 障者 その他
		障児			
		障者 3			
		その他			
	適切である	児童 2	17 児童 6 障児 5 障者 4 その他 2	児童 障児 障者 その他	児童 障児 障者 その他
		障児 1			
		障者 10			
		その他 1			
	努力を要する	児童	4 児童 障児 2 障者 2 その他	児童 障児 障者 その他	児童 障児 障者 その他
		障児			
		障者 2			
		その他			
	多くの努力を 要する	児童	児童 障児 障者 その他	児童 障児 障者 その他	児童 障児 障者 その他
		障児			
		障者			
		その他			

(6) 施設の役割と機能の理解

表 6

施設の役割と 機能の理解		学 生 の 自 己 評 価			
		とても良く出来た	良く出来た	あまり良く 出来なかった	出来なかった
施設 の 評 価	優れている	児童	3 児童 3 障児 障者 その他	1 児童 障児 障者 1 その他	児童 障児 障者 その他
		障児			
		障者 1			
		その他			
	適切である	児童 1	22 児童 8 障児 5 障者 8 その他 1	児童 障児 障者 その他	児童 障児 障者 その他
		障児 1			
		障者 4			
		その他 1			
	努力を要する	児童	8 児童 2 障児 1 障者 4 その他 1	児童 障児 障者 その他	児童 障児 障者 その他
		障児			
		障者 2			
		その他			
	多くの努力を 要する	児童	児童 障児 障者 その他	児童 障児 障者 その他	児童 障児 障者 その他
		障児			
		障者			
		その他			

施設の評価について見ると、「優れている」5名、「適切である」が32名、「努力を要する」が11名、「多くの努力を要する」はいなかった。

学生の自己評価を見ると、「とても良く出来た」が10名、「良く出来た」が33名、「あまり良く出来なかった」が5名、「出来なかった」はいなかった。

施設側の評価、学生の自己評価、いずれも「適切である」、「良く出来た」が最も多くなっている。

評価をクロスした時に一番多いのが、施設の評価「適切である」・学生の自己評価は「良く出来た」(22名)で、二番目に、施設の評価は「努力を要する」・学生の自己評価は「良く出来た」(8名)が多い。

顕著な相違点として、施設側が「優れている」と評価したのに対し、「あまり良く出来なかった」と自己評価した

学生が1名、「適切である」と評価したのに対し、「あまり良く出来なかった」と自己評価した学生が3名いる。また、施設側が「努力を要する」と評価したのに対し、「とても良く出来た」と自己評価した学生が2名、「良く出来た」と自己評価した学生が8名いる。

(7) 子ども（利用者）の観察とその記録

表7

子ども(利用者)の観察とその記録		学生の自己評価					
		とても良く出来た	良く出来た	あまり良く出来なかった	出来なかった		
施設の評価	優れている	児童 1	2	児童 1	2	児童	児童
		障児		障児		障児	
		障者 2		障者 1		障者	
		その他		その他		その他	
	適切である	児童 1	23	児童 10	2	児童 1	児童
		障児 2		障児 1		障児	
		障者 3		障者 9		障者	
		その他		その他 3		その他	
	努力を要する	児童	3	児童	4	児童 1	児童
		障児		障児 2		障児 1	
		障者 2		障者 1		障者 2	
		その他		その他		その他	
	多くの努力を要する	児童	1	児童	1	児童	児童
		障児		障児 1		障児	
		障者		障者		障者 1	
		その他		その他		その他	

* 1施設（障害者支援施設）が1名分未記入のため、その施設の評価と学生の自己評価は除いている。

施設の評価について見ると、「優れている」5名、「適切である」が31名、「努力を要する」が9名、「多くの努力を要する」が2名であった。

学生の自己評価を見ると、「とても良く出来た」が11名、「良く出来た」が29名、「あまり良く出来なかった」が7名、「出来なかった」はいなかった。

施設側の評価、学生の自己評価、いずれも「適切である」、「良く出来た」が最も多い。

評価をクロスした時に一番多いのが、施設の評価「適切である」・学生の自己評価は「良く出来た」（23名）で、二番目に、施設の評価は「適切である」・学生の自己評価は「とても良く出来た」（6名）が多い。

顕著な相違点として、施設側が「適切である」と評価したのに対し、「あまり良く出来なかった」と自己評価した学生が2名いる。また、施設側が「努力を要する」と評価したのに対し、「とても良く出来た」と自己評価した学生が2名、「良く出来た」と自己評価した学生が3名いる。施設側が「多くの努力を要する」と評価したが、「良く出来た」、「あまり良く出来なかった」と自己評価した学生がそれぞれ1名いる。

(8) 個々の状態に応じた援助やかかわり

施設の評価について見ると、「優れている」8名、「適切である」が31名、「努力を要する」が9名、「多くの努力を要する」はいなかった。

学生の自己評価を見ると、「とても良く出来た」が22名、「良く出来た」が21名、「あまり良く出来なかった」が5名、「出来なかった」はいなかった。

施設側の評価は「適切である」、学生の自己評価は「とても良く出来た」が最も多い。

評価をクロスした時に一番多いのが、施設の評価「適切である」・学生の自己評価は「とても良く出来た」（15名）

表 8

個々の状態に応じた援助やかかわり		学 生 の 自 己 評 価					
		とても良く出来た	良く出来た	あまり良く出来なかった	出来なかった		
施設 の 評 価	優れている	児童 1	4	児童 2	1	児童 1	児童
		障児		障児		障児	
		障者 2		障者 2		障者	
		その他		その他		その他	
	適切である	児童 3	15	児童 7	1	児童	児童
		障児 1		障児 4		障児 1	
		障者 9		障者 4		障者	
		その他 2		その他		その他	
	努力を要する	児童	2	児童	3	児童 1	児童
		障児 1		障児		障児 1	
		障者 3		障者 1		障者 1	
		その他		その他 1		その他	
	多くの努力を要する	児童		児童		児童	児童
		障児		障児		障児	
		障者		障者		障者	
		その他		その他		その他	

と、施設の評価「適切である」・学生の自己評価は「良く出来た」(15名)で、二番目に、施設の評価は「優れている」・学生の自己評価は「良く出来た」(4名)、施設の評価は「努力を要する」・学生の自己評価は「とても良く出来た」が多い。

顕著な相違点として、施設側が「優れている」と評価したのに対し、「あまり良く出来なかった」と自己評価した学生が1名、「適切である」と評価したのに対し、「あまり良く出来なかった」と自己評価した学生が1名いる。また、施設側が「努力を要する」と評価したのに対し、「とても良く出来た」と自己評価した学生が4名、「良く出来た」と自己評価した学生が2名いる。

(9) 養護内容の理解

表 9

養護内容の理解		学 生 の 自 己 評 価					
		とても良く出来た	良く出来た	あまり良く出来なかった	出来なかった		
施設 の 評 価	優れている	児童	1	児童 1		児童 1	児童 1
		障児		障児		障児	
		障者 2		障者		障者	
		その他		その他		その他	
	適切である	児童 2	15	児童 7	5	児童 2	児童
		障児 3		障児 1		障児 2	
		障者 4		障者 5		障者 1	
		その他 1		その他 2		その他	
	努力を要する	児童	6	児童 2	4	児童	児童
		障児		障児		障児 2	
		障者 4		障者 4		障者 2	
		その他		その他		その他	
	多くの努力を要する	児童		児童		児童	児童
		障児		障児		障児	
		障者		障者		障者	
		その他		その他		その他	

施設の評価について見ると、「優れている」4名、「適切である」が30名、「努力を要する」が14名、「多くの努力を要する」はいなかった。

学生の自己評価を見ると、「とても良く出来た」が16名、「良く出来た」が22名、「あまり良く出来なかった」が9名、「出来なかった」が1名いた。

施設側の評価、学生の自己評価、いずれも「適切である」、「良く出来た」が最も多い。

評価をクロスした時に一番多いのが、施設の評価「適切である」・学生の自己評価は「良く出来た」(15名)で、二番目に、施設の評価は「適切である」・学生の自己評価は「とても良く出来た」(10名)が多い。

顕著な相違点として、施設側が「優れている」と評価したのに対し、「出来なかった」と自己評価した学生が1名、「適切である」と評価したのに対し、「あまり良く出来なかった」と自己評価した学生が5名いる。また、施設側が「努力を要する」と評価したのに対し、「とても良く出来た」と自己評価した学生が4名、「良く出来た」と自己評価した学生が6名いる。

(10) 記録に基づく省察・自己評価

表 10

記録に基づく 省察・自己評価		学 生 の 自 己 評 価			
		とても良く出来た	良く出来た	あまり良く出来なかった	出来なかった
施設 の 評 価	優れている	4 児童 1 障児 障者 2 その他 1	6 児童 2 障児 障者 4 その他	1 児童 障児 障者 1 その他	児童 障児 障者 その他
	適切である	8 児童 5 障児 1 障者 2 その他	11 児童 3 障児 2 障者 5 その他 1	8 児童 4 障児 1 障者 3 その他	児童 障児 障者 その他
	努力を要する	4 児童 障児 1 障者 2 その他 1	5 児童 障児 3 障者 2 その他	児童 障児 障者 その他	児童 障児 障者 その他
	多くの努力を要する	児童 障児 障者 その他	児童 障児 障者 その他	1 児童 障児 障者 1 その他	児童 障児 障者 その他

施設の評価について見ると、「優れている」が11名、「適切である」が27名、「努力を要する」が9名、「多くの努力を要する」が1名であった。

学生の自己評価を見ると、「とても良く出来た」が16名、「良く出来た」が22名、「あまり良く出来なかった」が10名、「出来なかった」はいなかった。

施設側の評価、学生の自己評価、いずれも「適切である」、「良く出来た」が最も多くなっている。

評価をクロスした時に一番多いのが、施設の評価「適切である」・学生の自己評価は「良く出来た」(11名)で、二番目に、施設の評価は「適切である」・学生の自己評価は「とても良く出来た」(8名)、施設の評価は「適切である」・学生の自己評価は「あまり良く出来なかった」(8名)が多い。

顕著な相違点として、施設側が「優れている」と評価したのに対し、「あまり良く出来なかった」と自己評価した学生が1名、「適切である」と評価したのに対し、「あまり良く出来なかった」と自己評価した学生が8名いる。また、施設側が「努力を要する」と評価したのに対し、「とても良く出来た」と自己評価した学生が4名、「良く出来た」と

自己評価した学生が5名いる。施設側が「多くの努力を要する」と評価したが、「あまり良く出来なかった」と自己評価した学生が1名いる。

(11) 子ども（利用者）の活動と生活の環境の理解

表 11

子ども(利用者)の活動と生活の環境の理解		学 生 の 自 己 評 価						
		とても良く出来た	良く出来た	あまり良く出来なかった	出来なかった			
施設 の 評 価	優れている	4	児童 1	1	児童 1	1	児童 1	児童
			障児		障児		障児	
			障者 2		障者		障者	
			その他 1		その他		その他	
	適切である	17	児童 5	18	児童 6	1	児童	児童
			障児 2		障児 4		障児 1	
			障者 10		障者 6		障者	
			その他		その他 2		その他	
	努力を要する	2	児童	3	児童 1		児童	児童
			障児		障児		障児	
			障者 2		障者 2		障者	
			その他		その他		その他	
	多くの努力を要する		児童		児童		児童	児童
			障児		障児		障児	
			障者		障者		障者	
			その他		その他		その他	

* 1 施設（福祉型障害児入所施設）が1名分未記入のため、その施設の評価と学生の自己評価は除いている。

施設の評価について見ると、「優れている」6名、「適切である」が36名、「努力を要する」が5名、「多くの努力を要する」はいなかった。

学生の自己評価を見ると、「とても良く出来た」が23名、「良く出来た」が22名、「あまり良く出来なかった」が2名、「出来なかった」はいなかった。

施設側の評価は「適切である」、学生の自己評価は「とても良く出来た」が最も多くなっている。

評価をクロスした時に一番多いのが、施設の評価「適切である」・学生の自己評価は「良く出来た」（18名）で、二番目に、施設の評価は「適切である」・学生の自己評価は「とても良く出来た」（17名）が多い。

顕著な相違点として、施設側が「優れている」と評価したのに対し、「あまり良く出来なかった」と自己評価した学生が1名、「適切である」と評価したのに対し、「あまり良く出来なかった」と自己評価した学生が1名いる。また、施設側が「努力を要する」と評価したのに対し、「とても良く出来た」と自己評価した学生が2名、「良く出来た」と自己評価した学生が3名いる。

(12) 保育士の役割と倫理の理解

施設の評価について見ると、「優れている」10名、「適切である」が33名、「努力を要する」が4名、「多くの努力を要する」はいなかった。

学生の自己評価を見ると、「とても良く出来た」が22名、「良く出来た」が23名、「あまり良く出来なかった」が2名、「出来なかった」はいなかった。

施設側の評価、学生の自己評価、いずれも「適切である」、「良く出来た」が最も多くなっている。

評価をクロスした時に一番多いのが、施設の評価「適切である」・学生の自己評価は「良く出来た」（17名）で、二番目に、施設の評価は「適切である」・学生の自己評価は「とても良く出来た」（15名）が多い。

表 12

保育士の役割と倫理の理解		学 生 の 自 己 評 価						
		とても良く出来た	良く出来た	あまり良く出来なかった	出来なかった			
施設 の 評 価	優れている	児童 2	4	児童 3	1	児童	1	児童
		障児		障児		障児		
		障者 4		障者		障者		
		その他		その他 1		その他		
	適切である	児童 3	17	児童 6	1	児童 1	1	児童
		障児 2		障児 4		障児		
		障者 9		障者 6		障者		
		その他 1		その他 1		その他		
	努力を要する	児童	2	児童	1	児童	1	児童
		障児		障児 1		障児		
		障者 1		障者 1		障者		
		その他		その他		その他		
	多くの努力を要する	児童		児童		児童		児童
		障児		障児		障児		
		障者		障者		障者		
		その他		その他		その他		

* 1施設（福祉型障害児入所施設）が1名分未記入のため、その施設の評価と学生の自己評価は除いている。

顕著な相違点として、施設側が「適切である」と評価したのに対し、「あまり良く出来なかった」と自己評価した学生が1名いる。また、施設側が「努力を要する」と評価したのに対し、「とても良く出来た」と自己評価した学生が1名、「良く出来た」と自己評価した学生が2名いる。

2. 考 察

以上の結果から、施設の評価と、学生の自己評価が一致している場合が多い。特に、評価内容、「責任感」、「協調性」の2つの項目を除き、他の10項目では、施設の評価「適切である」・学生の自己評価は「良く出来た」というパターンが最も多くなっている。学生が施設側とほぼ同じ観点や基準で、自身の実習を評価したとも捉えられる。しかし、評価が一致していることで、課題がない訳ではない。評価が一致し、どちらも高い傾向にあるケース、逆に低い傾向があるケースがあるが、どちらにせよ、次の実習のために、さらには卒業後、保育者として現場に立つことを踏まえ、保育者としての資質向上のため、それぞれの評価内容に含まれる力を育む必要がある。

また、施設の評価と学生の自己評価が一致していないケースがあることも明らかとなった。これには、施設側の評価が学生の自己評価よりも高いケース、逆に、学生の自己評価が施設側の評価よりも高いケースがある。施設側の評価が学生の自己評価よりも高いケースは、人数の多かった評価内容の項目を上から3つ挙げると、順に、「記録に基づく省察・自己評価」（9名）、「養護内容の理解」（6名）、「意欲・積極性」（5名）である。学生の自己評価が施設側の評価よりも高いケースで、人数の多かった評価内容の項目を上から3つ挙げると、同じ人数で、「施設の役割と機能の理解」（10名）、「養護内容の理解」（10名）、「記録に基づく省察・自己評価」（10名）であった。また、「探求心」は9名であった。相違がある場合は、施設側と学生との観点や基準が違うことが考えられる。特に相違が顕著である、評価内容、「記録に基づく省察・自己評価」、「養護内容の理解」の2つの項目については、今後、相違が生じやすい項目であることを念頭に置き、学生にも「伝えながら、事後指導や次の実習の事前指導をすべきであろう。

他に気になる点として、評価内容の「責任感」、「協調性」の2つの項目は、学生の自己評価は「とても良く出来た」が目立って多い。これらの項目の評価内容に対し、基準が低い学生が多いとも言える。なぜこの2つの項目で「とても良く出来た」と自己評価する学生が多いのか、その理由は今後分析していきたい。

本稿では実習評価票と自己評価票を比較したことで、今後の実習指導の手掛かりが得られたが、新たな課題も見え

てきた。

第一に、なぜ評価が一致せず、相違が生じるケースがあるのか、その理由を明らかにすることである。また、一致している場合においても、互いに評価が低い場合は、なぜ低いのかも明らかにすることで、今後の指導に活かせるだろう。本稿においては、それぞれの評価内容における実習先と学生の観点や基準が同じか、もしくは違うかという点も明確には出来なかったため、今後明らかにすることで、正確な比較が出来ると考える。

第二に、自己評価票を有効に活用するためには、学生が実習評価票の結果を把握することが不可欠であり、実習評価票の学生への開示について、検討が必要であることだ。前述した通り、これまでこども保育コースでは、実習評価票は学生に開示していない。全国保育士養成協議会が、全国の保育士養成校とその実習指導者が共有するために作成した「保育実習指導のミニマムスタンダード」においては、実習評価票を用いた発展的、先駆的な事例として、実習事後指導で学生に実習評価票を開示し、学生が評価を把握することで、今後の課題を見つけ、成長を促しているケースが挙げられている。学生へ開示するには、事前に実習先の了承を得るなど連携し、学生によってはフォローが必要になるが、学生自身が、実習評価表と自己評価票の相違点や、互いに評価の低かった評価内容を把握し、その理由を考えることは、深い自己理解や、次の実習、保育者となった際の新たな課題設定にも繋がる。また、比較した結果やその傾向については、今後実習を行う学生に対して、実習事前指導や事後指導で伝えることも有効であると考えられる。

第三に、実習先の評価と学生の自己評価を比較した結果を、実習先にどのような方法で開示し、共有するのか、そして学生への指導にどう反映してもらうのかということである。実習先と学生側との視点の違いや、学生の力が不足している評価内容などを伝えることで、次に実習を行う学生への指導に活かしてもらう様、連携を深めることも重要である。

本稿では、2018年度に保育実習Ⅰ（施設）を行った2年生を対象としており、今回の結果は直ちに一般化出来るものではないが、実習先の評価と学生の自己評価の比較を継続し、さらに効果的な実習事前指導、事後指導を行うために研究を続けていきたい。

注

- 1) 「教育職員免許法施行規則」（文部科学省）によれば、幼稚園教諭二種免許取得のための実習は4週間程度、「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」（厚生労働省）によれば、保育士資格取得のための実習は、「保育実習Ⅰ」（保育所実習と施設実習）で概ね20日間、「保育実習Ⅱ」（保育所実習）または「保育実習Ⅲ」（施設実習）のいずれかの概ね10日間行う。本学では「幼稚園教育実習Ⅰ」（5日間）、「幼稚園教育実習Ⅱ」（15日間）、「保育実習Ⅰ（保育所）」（10日間）、「保育実習Ⅰ（施設）」（10日間）、「保育実習Ⅱ」または「保育実習Ⅲ」（選択制、10日間）を行っている。
- 2) 「教育職員免許法施行規則」（文部科学省）によれば、幼稚園教諭二種免許取得のための実習として5単位が規定されており、それには事前及び事後の指導1単位が含まれている。本学では、「幼稚園教育実習事前事後指導」を1単位取得することとし、「幼稚園教育実習Ⅰ」、「幼稚園教育実習Ⅱ」それぞれに事前事後指導を行っている。「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」（厚生労働省）によれば、保育士資格取得のための実習指導として「保育実習指導Ⅰ」（2単位）、「保育実習指導Ⅱ」（1単位）または「保育実習指導Ⅲ」（1単位）を行うこととしている。本学では、「保育実習Ⅰ（保育所）」および「保育実習Ⅰ（施設）」の事前事後指導として「保育実習指導Ⅰ」を、「保育実習Ⅱ」の事前事後指導として「保育実習指導Ⅱ」を、「保育実習Ⅲ」の事前事後指導として「保育実習指導Ⅲ」を行っている。

文 献

- 1) 一般社団法人全国保育士養成協議会 (2018) 保育実習指導のミニマムスタンダード「協働」する保育士養成 Ver.2, 中央法規